
270分

駈牙 蓮

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

270分

【Nコード】

N9183Y

【作者名】

駆牙 蓮

【あらすじ】

オペ室看護師である成海大和ナルウミヤマトは、親友であり同期の看護師の進藤シンド雅樹ウマサキに報われない恋をしている。長年の友情を壊したくないが、苦しい想いは募っていき。

「 始業時間一分前」

寝癖もろくに直さないままいつも通り青い帽子を被り、出勤簿のソフトの入ったパソコンをクリックする。そんな俺の横で笑いながら画面を覗き込むのは、同期の進藤雅樹。通称マサ。高い身長と、それを持って余した様な猫背が印象的だ。

「・・・間に合えば何時でも一緒だったの」

俺は成海大和。通称ナル。マサとは同期の看護師だ。看護師と言っても病棟ではなく手術室で働いている。

「ナルんところは今日何のオペ？」

「スパイン」

「・・・ダリいな。頑張れよ」

「おー」

マサは大学時代からの付き合いで、かれこれ七年目だったりする。そして三年越しの俺の不毛な片想い。

女ばかりの看護学部だったから、マサと仲良くなるのに時間はかからなかった。一緒にバスケット部入って、毎日バカやって。彼女いる時もマサという方が楽しくて、それが原因で喧嘩したりフラれたりもした。だから誰と付き合ってもいつも長続きしない。

それに比べて、マサはもう彼女と五年も続いている。二つ下のバスケット部のマネージャーだ。俺の不毛な恋は、今年同じ職場にマサの彼女が就職してきた時点で更にどん底だった。

「・・・移動希望出そうかな」

「何か言ったか？」

患者の入室を入口で待ちながら呟いた独り言が、同じくすぐ近くで待機していたマサに聞かれていた様だ。

「何でもねーよ」

毎日毎日、腕の悪い外科医に偉そうに怒鳴られたり、更年期の口煩い上司に嫌味を並べられたり。　　いい事ねーよなあ。

「あ、そうだ。今日金曜だろ。明日勤務じゃねーよな。飲みに行かね？」

「・・・お前のカノジヨに怒られねえの？」

「そう言っつて、ナル全然遊んでくれなくなっただろ。今日はバスケット部に顔出して、そのまま飲むぞ。な、決まり」

目を細めて笑うと、マサはそのまま入室してきた患者を連れて担当の手術室に向かって行った。

いい事も、あるもんだな。

この気持ちが不毛な物である事には変わらないのだが。それでも、一番大事な同性の友人と思っってもらえるだけで。それだけで俺は十分なんだ。

酒は、驚く程早く身体にまわっていった。

「ナル、大丈夫か？」

大丈夫、じゃない。激しい運動の後、しかもかなりの空腹。さらに喉の渇きが勝って酒をどんどん流し込んでしまった。

日々の仕事のストレスと最近の睡眠不足。あとは久しぶりにマサと飲んでる事。全てが悪い方向に行ってしまった様だ。

「・・・気持ち悪い。頭も痛てえ」

「もう帰るか。代行呼ぶからちよっと待ってるよ」

言ってマサが立ち上がる。

もう無茶をして酒に漬れる歳でも無いのに。何よりせつかくのマサとの飲みだったのに。情けなくて涙が出そうだ。・・・呆れられたかな。いや、呆れられて当然だろ。

反省点は山ほどあるが、とりあえず今は横になりたい。なんだか寒気もしてきた。明日が土曜で本当によかった。

「ナル。代行来たから。鍵出せるか？」

「ん・・・」

店までは俺の車で来たから、帰りは代行でマサン家回りで降ろして帰る予定だった。

車までマサに支えられながら覚束ない足どりで向かう。・・・慣れた車の振動がひどく気持ち悪い。

「ナル。お前らしくねーなあ。本当に大丈夫か？ただでさえ最近様子おかしかつただろ」

・・・バレてる。そりゃあお前とお前の彼女が一緒に働く所なんて見たくないに決まってるだろ。でも今は言い訳する元気もねーから。

「あつ、すみません。一人ここで」

マサの話し声が聞こえる。ああ、もう着いてしまったのか。目を

開けるのも喋るのもしんどいから、もうこのままでいいや。若干夢か現実かも分からないし。

「 やっぱり、ここで二人降ります。停めてください」

「・・・ん？」

「ほら、エレベーターまで頑張れって。ナル、そんなデカイ身体は担がねーぞ」

何でマサン家に？まあいいや。もうどうでも

翌朝、目が覚めると二日酔いらしい頭痛と、何故か酷い寒気に襲われていた。不思議な事には額に冷えピタまで貼ってあるではないか。

「えーつと・・・」

ここはマサン家、マサのベッド。昨日マサと呑んで、俺が勝手に潰れたんだよなあ。

「げっ、12時半?!」

「ナル、起きた？大丈夫か？」

時計の針に驚いた所で、ハーフパンツとTシャツといった出で立ちのマサが台所から盆を提げてやって来た。そういえば俺も同じ様な格好に着替えているではないか。マサがしてくれたのか？

「お前、完璧カゼ引いてんだよ。通りでおかしいと思った。雑炊作ったから喰って寝とけて」

優しい味の鮭と卵の雑炊は、食欲が無い胃の中にもすんなりと収まってくれた。

そういえばマサは昔から面倒見が良かったっけ。身も心も弱っている今の状態では、気を抜けばうっかり涙が出そうだ。

「ホント、ゴメン」

「らしくねえこと言ってねーで、早く寝て治せって」

言ってポンポンと叩かれた頭が熱いのは、熱のせいにすることにした。

その土日はすっかりマサの世話になり、月曜日の出勤には体調は元通りとなっていた。実際一人暮らしの身には風邪っぴきは辛い。ただこの看病は予想外の事態を引き起こしていた。

「え？ケンカですか？」

「そうよー。進藤さんと杏奈ちゃん。困るわあ、今日は同じルームなのに」

二個上の看護師の先輩が朝っぱらからばやいてきたのは、どうやらマサと彼女のケンカ騒ぎらしい。

「何ですか？マサとかあんま怒ってんの見たことないですけど」

「まあ怒ってんのは杏奈ちゃんの方なんだけど。なんか付き合って五年記念日を進藤君がドタキャンしたらしいわよ」

「へ？」

全くの初耳だ。じゃあなんだ。この連休、アイツは彼女との記念日すっぱかして雑炊なんか作ってたって事か？！

「何でも、自宅で風邪引いてる友達の看病してるからとか言ったらしいのよ。さすがに怪しいって言うか、どこの女連れ込んだのよってハナシで」

「・・・俺ですけど？！てかマサもちゃんと説明しとけよ！ああ、風邪は治ったのに頭が痛い。」

「てか第一、マサが浮気とかする筈ないじゃないっすか。あんなクソ真面目、そうそういないすよ」

「そうねー。遊び人の成海さんと違ってマジメよね」
「んなんっ?!」

なんだと?!確かに誰と付き合っても長続きはしないけど、それは一途の裏返しだったの。

「・・・まあいいですよ」 とりあえずマサに話を聞こう。そんなに必要なら俺からアイツの彼女に説明をしよう。それから

「別れた」

「へえっ?!」

思わず上擦ったマヌケな声を発してしまった。月曜日も時間が合わず、火曜日も俺が遅出で、水曜日はマサが準夜で、やっと時間が取れそうな金曜日。かなり延長したマサの付いた手術が終わるのを待ち、片付けも待ち、やっとロッカールームに入って来たマサの第一声がソレだった。

「どうしたんだよ。やっぱりこないだの記念日すっぱかしてケンカしたのが原因？」

「知ってたのか」

マサは俺が知らないと信じていたのか、心底驚いた顔をした。

「なあ、あれは誤解だって俺からちゃんと説明して」

「いや、いいって。きっかけはアレでも、それだけが原因じゃねーし」

「でも・・・」

片想いは辛いけど、別れたさせたかった訳じゃない。マサに辛い思いはさせたくないのだ。この複雑な男子の純情。

「整形の太田先生と付き合っただってよ」

はい?!一瞬で頭に血が上るのを感じた。

「俺といってもドキドキしなくなっただと。五年記念を祝う筈だった日に太田先生に食事に誘われて行ったら好きになったらしい」

人事っぽく苦笑いで話すマサに掛ける言葉が見つからない。ヒデよ。太田なんてチビデブな上、オペも下手で嫌味で偉そうで。乗り換えたのも絶対『医者』っていう肩書き目当てだろ。マサ程いいヤツいねーのに。

「何でお前が泣いてんだよ」

「え？」

知らない内に涙が頬を伝っていた様だ。止めようにも、それでもなお溢れてくる涙を、俺はこの時止める術を知らなかった。

マサは入学当時から目立つ存在だった。身長が高くバスケが上手い、顔だつて男前の部類だろう。そのくせ浮いた話がない。だから女にモテた。ノリが良く話も面白い。だから男からも好かれていた。俺が大学でもバスケ続ける事になったのだって、マサがきっかけだった。

「ああっ！ドイツ語の訳当たってたの忘れてた！ヤベー間に合わねえ……」

「成海、どこ当たってんの？問4？俺、問3だったから問4もやってるけど、写す？」

元々、仲のいいグループが違った俺らが親しくなったのは、大学一年の春のそんな些細な会話がきっかけだった。

「マジいいの？じゃあ天津麻婆丼な」

その日の昼、お礼がてらマサと学食にやって来た。思えば初めて二人で飯を食べたのもこの時だろう。

「おう。何でも奢るよ。てか進藤って頭いいのな。和訳完璧だったし」

「全然アホだつて。高校まで部活しかやって来なかったからな」

「そうなの？何部？」

「小学校からずっとバスケ」

「マジで?!俺も!」

「マジ?!」

こんな感じで意気投合してしまい、テニスサークルとかでキャンパスライフを満喫するという俺の青春プランはアツサリと覆される。バスケ馬鹿二人は、結局大学でもブレる事なくバスケをする事になるのだ。

俺も多分女にモテないわけじゃない。女の子に好かれるのは人並みにも男だから嬉しくない訳がない。だけど付き合ってみればいつも同じ結果となった。

『どうせヤマトは男友達とバスケの方が大事だもんね』
今考えると大事なのはマサだった訳なんだが。

マサが入部したばっかのマネージャーに押し切られる形で付き合い出した時は、まだ俺も自分の気持ちに気付いていなかった。だから胸の辺りがやたらイタかった理由も分からずにいるんだけど。

引退、就職、卒業を目前に気付いてしまった離れ難いという己の本音。押し込められていた『コイゴコロ』。

苦しい自分の心情とは裏腹なんだけど、マサの幸せを祈る気持ちも嘘じゃない。世間一般の幸せを俺がマサにあげる事は出来ないから、だからマサへの想いは一生隠しておくつもりだった。

マサには笑っていてほしい。苦しまないでいてほしい。それだけが真実だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9183y/>

270分

2011年12月3日21時45分発行